



Title	看護学生の目標達成行動を向上するためのEmotional Intelligence教育に関する研究
Author(s)	井村, 香積
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58975
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	井村香積
博士の専攻分野の名称	博士(看護学)
学位記番号	第 25275 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	看護学生の目標達成行動を向上するための Emotional Intelligence 教育に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 大野ゆう子 (副査) 教授 井上 智子 教授 早川 和生 教授 小笠原知枝

論文内容の要旨

【背景】King(1985)は、看護において患者の置かれている状況を正確に知覚し、コミュニケーションをとることで患者の健康問題に関する目標を達成することができるかと述べている。しかし、看護学生が臨床実習で困難に感じているのは、患者との関わり方(安藤他, 2010)や患者とのコミュニケーション(篠田他, 2008)といった対人関係技能であった。こうした看護学生の人間関係を考えると、患者の置かれている状況を正確に知覚できず、患者とのコミュニケーションを通じて目標を達成できなくなる可能性がある。

対象の状況を正確に知覚する手段には Emotional Intelligence (EI) がある。EI は対人関係技能であり、自己・対人・状況対応領域から成り立っている(内山, 2001)。コミュニケーション能力の低下が指摘される現代の看護学生において、EI を高めればコミュニケーション能力も高まり、さらに患者のニーズを正確に知覚し、患者の目標達成行動がとれることが期待される。そのため、看護学生の EI を高め、患者の目標達成を高める教育方法を早急に検討する必要がある。しかし、教育の指標となる看護学生の EI の特徴とそれに関与する要因と EI、コミュニケーション、および目標達成行動をつなぐ相互の関連性と、それに影響する要因は明らかにされていない。

研究1では、看護師との比較から患者の健康問題に関する目標を達成する行動と EI の関係における看護学生の特徴を明らかにする。研究2では、EI に関与する要因と、EI、コミュニケーション、および目標達成行動をつなぐ相互の関連性について看護学生を対象に調査し、今後の看護学生の目標達成行動を向上するための EI 教育のあり方を考察する。

【研究1】本研究の目的は、King の理論に基づいて患者の目標を達成するために行われる看護師や看護学生の相互行為と Mayer の理論に基づいた EI がどのように関係しているかを明らかにすることであった。

研究方法は、看護師 157 名と看護学生の 3 年生 89 名を対象とし、Emotional Quotient Scale (EQS) と看護師の Scale of Nurse's Performance Goal Attainment (NPGA) を用いた質問紙調査法である。分析方法は、看護師と看護学生の NPGA と EI を比較するために、t 検定を使用し、NPGA と EI の対応因子の関係をみるために、ピアソンの積率相関係数を用いた。

その結果、看護学生は看護師に比べて、EI では対人対応領域の得点が有意に高かった ($p < 0.01$)。NPGA と EI の対応因子の関係では自己洞察を除く全ての対応因子に有意な相関がみられた。しかし、NPGA と EI の対応因子の相関係数について看護師は EI の全ての対応因子と NPGA が有意な相関 ($r = 0.27 \sim 0.44, p < 0.01$) があったが、看護学生は EI の自己洞察と NPGA は相関がなかった。このことから、看護学生は看護師ほど、EI を活用して、目標達成行動をとっていない可能性を示唆された。

【本研究 2】現代の看護学生の人間関係技能が低いことが指摘されていることと（畠中, 2004）、研究 1 では、EI と NPGA の関連性が明らかになったことから、研究 2 では、EI に関与する要因と EI、コミュニケーション、および目標達成行動をつなぐ相互の関連性の「EI-目標達成行動関連要因概念モデル」を構築し、その検証をすることである。

対象は 4 年生の看護学生 127 名に質問紙調査を行った。使用した尺度は「EI」を測定する EQS、「目標達成行動」を測定する NPGA、コミュニケーションスキル尺度である。さらに、「EI」に影響する要因として、性格 (Y-G テスト)、自作の人間関係体験に関する質問項目（同胞の数、世代を超えた交流、人と関わることが好き、複雑な感情体験）を加えた。分析は共分散構造分析を用いた。

その結果、EI に「人と関わることが好き」「兄弟」「複雑な感情」「リーダーシップ」が影響し、これらが、「目標達成行動」に影響する直接効果と「コミュニケーション」を経て「目標達成行動」に影響する間接効果が確認された。特に「EI」の「目標達成行動」への直接効果が強かった。

【結論】看護学生は EI の「対人対応領域」が高く、「EI」と「目標達成行動」の関連性は認められたが、看護師ほど目標達成行動に EI を活用していなかった。また、EI の影響要因である「人と関わることが好き」「兄弟」「複雑な感情」「リーダーシップ」が相互に関連し、これらの要因が EI に影響し、さらに「目標達成行動」に影響する直接効果と「コミュニケーション」を経て「目標達成行動」に影響する間接効果が確認された。特に「EI」の「目標達成行動」への直接効果が強かった。つまり、看護学生の EI とコミュニケーション、目標達成行動の「EI-目標達成行動関連要因概念モデル」の妥当性が検証された。

以上から、教育の場には「コミュニケーション」を経て「目標達成行動」に影響する間接効果を高めるために、多くの人間関係が体験できるような環境づくりが必要である。また、学生が EI の影響要因を疑似体験できるような場を設定し、複雑な感情を体験させ、看護学生の EI の向上をめざす。教員は学生との関わりにおいて、学生に人との関わりを振り返らせ、自己と他者の感情を理解し、どのようなコミュニケーションをとるかを考えさせる EI の概念を取り入れたコミュニケーション教育を行う。看護学生の EI とコミュニケーションを向上した後に、EI を目標達成行動に活用できるように状況設定をし、その状況に

合わせた EI、コミュニケーションを活用できるような教育を行う。

【本研究の限界と課題】本研究では、看護学生の目標達成行動と EI の関連、さらにそれに影響する要因を検討した。そして、看護学生の目標達成行動を向上させるためには、EI の概念をとり入れたコミュニケーション教育が必要であることが明らかになった。しかし、今回の研究は看護学生 3 年生を対象としており、学生がどの時期のどのような体験をすれば EI が向上し、さらに、目標達成行動が向上するのは検討されていない。今後、1 年生から 4 年生の看護学生を対象とした縦断的研究を行い、どの時期にどのような体験が効果的なのかを検討する必要がある。その上で、看護学生は多くの人と関わりを持ち、複雑な感情を体験し、EI を向上する教育と、EI を目標達成行動に活用できるような教育を検討することで、看護学生の EI と目標達成行動を向上していきたいと考えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は King (1985) の目標達成理論を基盤として、看護学生の患者の健康問題に関する目標達成行動を向上するための Emotional Intelligence (EI: 情動知能) の教育方法を検討したものである。

研究 1 では、目標達成行動と情動知能との関連性を質問紙調査により分析した。その結果、患者の健康問題に関する目標達成行動と EI は関係があり、看護学生の特徴として、EI の人への思いやり、共感といった対人対応領域は看護師より高いが、看護師ほど目標達成行動に EI を活用していないことを明らかにした。

研究 2 では、看護学生の EI・目標達成行動の関連要因概念モデルを構築しその妥当性を共分散構造分析にて検証した。「EI」が患者状況の正確な知覚を促し、コミュニケーションを促進し、目標達成行動を高めることを明らかにした。また、EI には、過去の人間関係の体験要因と性格特性の要因が相互に関連しながら関与していることを明らかにし、「EI」からコミュニケーションを経て目標達成行動に至る概念モデルを検証した。

本論文で構築された EI・目標達成行動概念モデルにおいて、看護学生の「EI」を自己対応、対人対応、状況対応から向上を促す教育方法の必要性が示唆された。また、目標達成行動を向上するために、EI を目標達成行動に利用できるような状況設定を行い、その状況に応じた EI とコミュニケーションが活用できるような教育を行う必要性が示唆された。

本論文は看護学生の患者の目標達成行動の概念モデルの妥当性を検証するとともに、目標達成行動を向上する教育方法を EI の視点から検討したことは独創的かつ有益であり、今後の看護教育に貢献するものである。以上のことより、博士（看護学）の学位に値するものと考えられる。